

前回個人研究発表まとめ

**「フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』における生活世界と主観性の構造の関連について」**

小島 雅史（本学社会学研究科修士課程）

本発表では、我々の認識の基礎をなす生活世界を焦点化したフッサールの著作、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936、以下『危機』）の読解を通じて、次の二点を明らかにした。第一に、『危機』におけるフッサールの科学批判の内実である。第二に生活世界の諸性格である。この二点を明らかにする為に、『危機』の大きな主題の一つである生活世界の分析を通じ、対象の意味付与の本質的な形式を見る超越論的現象学に至る議論の整理を行った。以下では、当日質疑での議論を加味しつつ本発表の概要を述べる。

まず、フッサールの科学への批判的考察に注目し、生活世界の地盤としての性格を明らかにした。生活世界とは、経験的で主観的な生（なま）の世界と言える。フッサールは、このような主観的な経験からの認識を排し、客観的—論理的な世界の説明を目指す科学が、実は生活世界における主観的—相対的な直観からの妥当性に依拠していることを指摘した。要するに、我々は普段の日常における、主観的—直観的な対象把握において既に、科学のそれに先立つ妥当性を得ることができるのであり、科学的知見はその上に構築されるものだと言破したのである。さらにフッサールは、主観的な経験において既に基礎的な妥当性が成り立っているというこの事実が、その妥当性を可能にしている条件を必要とすると指摘する。この条件こそ、我々の経験を規定するアприオリな性格を持っており、全ての認識を成り立たせる恒常的な前提、即ち「地盤」としての生活世界の存在である。例えば、ある科学的理論が他の科学者にもそのまま妥当性を持つことは、数式といった方法の共有や、その理論が科学者それぞれの主観的な経験において妥当性が確保されることに依る。さらに数式等の方法の基礎にも生活世界的な経験が存在する。以上のような指摘により、科学が主張する客観性は、科学者自身の主観的な経験と、その前提たる生活世界抜きには成立せず、生活世界が科学的知見を含む全ての認識の基礎として普遍的な問題であることが示されるのである。

次に、フッサールが行う判断中止という作業に注目し、科学において看過されていた生活世界の、我々の意識の構造における位置付けを確認した。判断中止とは我々の持つ素朴な妥当性に対する判断を保留し、その妥当性が如何に成り立っているかを問う作業である。まず判断中止が為されるのは、客観的科学に対してであり、それにより上記の如く、全ての経験の基礎である生活世界や、主観的な経験が客観性の基礎にあることが明示化される。そして続いて、問題は、生活世界を恒常的な前提としながら為さ

れる、我々の主観的な経験の構造を明らかにすることに移る。フッサールによると、主観的な経験からの妥当性を得ながら存する我々の生においては、周囲の対象が様々な形で与えられる。そして、それらの経験は互いに関連し合い一繋がりを生を形成する地平的な性格を持つ。フッサールはこの地平的に関連する経験全体に、全面的に判断中止を行う。つまり生活世界の内での経験という次元を超え、全ての経験に共通する本質構造をメタな次元で明らかにしようとする。この構造は自我—自我の作用—対象という形でまとめられる。フッサールは具体的な経験を判断中止を経て考察しながら、上のような経験の本質構造を導き出そうとした。その為に『危機』では我々の日常的な認識とその基礎としての主観的な経験が焦点となり、それらを支える生活世界が主題化されたのである。